
目覚めても僕が存在する世界

milai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目覚めても僕が存在する世界

【Nコード】

N1559S

【作者名】

milai

【あらすじ】

一人の男子高校生、佐伯怜を取り巻く17歳たちの甘酸っぱい日常。家族、友達、恋愛、将来、様々な葛藤の中で精いっぱい生きる彼らの青春ストーリー。

登場人物紹介

登場人物

ささえきれい
佐伯 怜

高校2年。1年の時に10カ月間の語学留学を経験。英語に長けているが英語は単なる道具ツールという考えがある。現在は3ピースバンドを組んでいるがバンドについては多言はしない。光に信頼を寄せている。何にでも関心や興味を持たないゆるい性格だが、それが一見クールに見られる傾向がある。

しいきひかる
椎木 光

怜の親友。帰国子女でイギリス人家系の血を引いている。お茶目なキャラクターで通っているが時折冷めた表情を見せる。独り言や怜と話す時に時折英語で会話をする傾向がある。

佐伯 ゆずる

怜の双子の妹で怜と光のクラスメイト。何をしても怜に勝てないコンプレックスから怜を嫌う。普段は明るく元気な性格だが、怜に対しては冷たい態度をとる。怜の親友光にも同様の態度で接する。特待生の留学枠に入るために英語を勉強中。

すずはらかえて
鈴原 楓

怜、光、ゆずるのクラスメイト。ゆずるのよき理解者で怜の元彼女。

カズヤ

怜のバンド仲間。ヴォーカルを務める。

シユウ

怜のバンド仲間。ギターを務める。

名瀬奏真なせあすま

怜の先輩で憧れの人。別作【鉛色の瞳の少年】から。

prologue

夕方4時を過ぎた放課後、教室から一斉に生徒たちが流れ出す。部活動に向かわないほとんどの生徒が込み合う駐輪場で我先にと自転車さえざいをぶつけあいながら校門を出る。

佐伯怜さえざいはそんな様子を横目で観察しながら、歩いて校門を出た。彼の隣を自転車で通りすぎる友人たちに、時々無愛想な挨拶をしながら、一台の白い車に乗り込んだ。

「おつかれっすシユウ君。毎回すんません」

怜は運転席に座る茶髪の少年に声をかけて、肩に背負っていた教科書の入ったカバンを後部座席に降ろすと、その隣に寝かせてある黒いケースをそつとひと撫でした。

いたるところに傷の入ったベースのケースだ。noncigaretteという横文字の白いステッカーがド真ん中に貼られている。初めはださいと批判しあったこのバンド名も、今では愛着が湧いて自分の中のロツクな血が騒いだ。

そんな俺の心情を読んでか、シユウさんは「新曲」と言っただだりリックの入っていない音源を車内に流した。大学院に進むんだと、この間メンバーを抜けてしまった先輩の最後のドラムが少し切なそうに、それでも力強くリズムを刻んでいる。

俺たちのバンドnoncigaretteは俺、佐伯怜と2個上のシユウ君、そして隣の高校に通う俺と同じ年のカズヤで作ったお遊びのバンドだった。

イカついロツクバンドにしようぜ、とふざけ半分で始めた俺たちは、形から入るタイプでいち早くバンド名を決めた。どんなに悪そうなりリックを書いて、どんなにハードなメロディーになっても、謙虚さや礼儀正しさは保ち続けようという意味もこめ、noncigarette。

当初はださいと笑いながらも見なれないアルファベットの並びが、妙に俺たちを大人びた気分させていた。

「怜、おまえまだ学校でバンドのこと秘密にしてんのか」

「そういうわけじゃないんだけど」

車がシユウ君の大学にある練習室に向かうまでの15分、シユウ君は決まってこの質問を俺にする。

ベースを、いつもシユウ君の車の中に置きっぱなしにする俺に、シユウ君は少しの疑問と不満を持っているようだった。

「クラスのやつらに、いろいろ聞かれるのが嫌なんですよ。それだけでなく、あいつのせいで目立つのに」

自分の言葉に深い深いため息が出た。

「ゆずるちゃん可愛いからな」

そう言っただけで笑ったシユウさんに、またため息が出た。

「あいつの前でそういうこと言わないで下さいよ。調子に乗るんで」

喉の奥でクツクツと笑っているシユウ君は左手で何度か音楽を変えた。相変わらずセンスのいい選曲で、右足がバンドのリズムによって自然に揺れた。

「ゆずるちゃん、そんなに性格悪いの？ 普通に良い子じゃね？」

シユウ君のいうとおり、ゆずるの外面は完璧で、彼女のせいで他人から被害を被ったことは今まで一度たりともなかったが、ゆずる本人からの被害は莫大で、手に負えるものではない。

それは双子の兄にしかわかりえない苦勞と苦痛だった。

シユウ君の大学の近くでカズヤを拾って、俺たちはいつも通りにシユウ君の大学の練習室へ楽器を運びこんだ。

スタジオを借りる金のない俺たちにとって、この場所は宝のようだった。

洋楽のロック、ハードなものからポップなものまでをシユウさんが選び抜き、俺が日本語と英語でリリックを書きなおし、それをカズヤが持ち前の甘いボイスで歌いあげる。

それが俺たちのバンドだった。

もともとお遊びで始めたバンドだったが、大学に入り時間に余裕のできたシユウ君が、最近では自分で曲を作ったりと、本格的に練習に取り組んできた。

アコースティックが好きな俺のために、しつとりとした曲が最近増えてきたが、もともと音楽ならなんでも自分色に変えてしまうカズヤにとってはどうでもいいようだった。

「ライブやりてーなー」

シユウ君の新曲を聞きながらうつつとりとするカズヤをよそに、「明日も朝早いな」と、そんな呑気なことを俺は考えていた。

日常はいつも平凡で、こんなハードなメロディーに重なる甘いボイスのように、刺激の中で緩やかに生きられたらと、やはり呑気なことをひたすら考えた。

通路まで溢れ出してとめられている自転車の隙間を通り、教室に近い裏の入り口から校舎に入ると、各教室からざわつく生徒たちの声が漏れだしていた。

突き当たりの階段を上り、一番奥の自分の教室へ向かうと、女子たちの甲高い声が聞こえてくる。

それにまじって聞こえる、双子の妹の声に、今日はもう来ているのか、とそんなことを考えた。

お気に入りの腕時計を見ると、もう1時間目の始まっている時間で、自分が遅刻したのか、なんて冴えない頭の片隅で思った。

白が基調のこのオシャレなブランド物の腕時計は、先月の誕生日、クラスメイトの椎木光しいきひかるから譲り受けた。

そんな彼自身は、ワイシャツの内側に、イギリス貴族の顔がデザインされた金の開閉式の懐中時計金を首からさげていた。なんでも、イギリス人である祖母の形見だという。

そんなことを頭にぐるぐるさせながら、教室のドアどガラリと引いた。

「怜が遅刻なんて珍しいな。いつもはゆずるが遅刻なのになー。席つけ」

黒板にやたらと長い公式を書き連ねていた数学教師が、茶化すように俺とゆずるの顔を見て笑った。

俺は小さく頭を下げて、一番後ろの席についた。

教室の真ん中の席にいる妹のゆずるが、とてつもなく凶悪な顔をして睨みつけてきたので、少しばつの悪そうな顔をしたのを隣の席の光に見られて苦笑いひとつ。

「She is so cute ha?」(ゆずるちよーかわい
いじゃん?)

「Are you kidding me?」(からかってんの?)
小さい声でそういう光に心底嫌そうな顔を向けると彼は嬉しそうに
ニヒッと歯を見せた。

俺たちのやりとりをよそに、ゆずるはもうすでにいつものゆるい顔
に戻っていて、くりくりと大きな目を輝かせて女友達とこっそりお
喋りに励んでいる。

彼女の切り替えの早さは尊敬に値する、かもしれない。

俺はそんな妹の隣の席でまっすぐ黒板に視線を向けている一人の女
性との姿をちらちらうかがいながら、ノートの隅にリリックを書き
綴った。

昨日シユウ君が持ってきた新曲に似合うような言葉を紡ぎ合わせ、
右足が自然に揺れるのを感じていた。

「怜、そういうえば担任の田中ちゃんが後で職員室来いって言ってたよ、
俺たち2人」

授業終了のチャイムが鳴る5分前、光がシャーペンをくるくる回し
ながらそう言った。

真っ白のままのノートに俺が少し驚いた表情を見せると、その視線
の先であるページに「OK?」とのびのびとした字でそう書いたの
で、俺は自分のノートに「OK」と大きく書いて見せた。

「でもなんで?」

チャイムが鳴り、教室に椅子を引きずる音が響く中、俺は光に問い
かけた。

光は「んー?さあ、知んね」と言って左耳のピアスを外した。

職員室に入る際に、光のように目立つ生徒はせめて身につけている
アクセサリーの類を外している。

時折、生徒指導係の教師が、それを没収してしまうためだ。

俺は光の体から外されていく多数のそれらを目で追いながら、最後
に光が手に取った懐中時計を凝視した。

いつかどこかで見たことのあるような気になるそれを、光はそつと額の前に掲げ、祈るように目を閉じた。

俺はそんな光を見て見ないふりをして職員室のドアを滑らせた。

「田中ちゃん来たよ」

担任教師の田中に向かつて光が歩き出すと、先生もやっと来たかと椅子ごとこちらを向いた。

「怜、寝坊したのか、ネクタイ歪んでるし」

田中ちゃんはまだまだ子供のよ様な顔をして俺のネクタイをぐいっとひっぱった。

新任教師で、他の先生からこき使われながらも、田中ちゃんはいつでも笑顔で子供っぽい。

光や俺でさえも田中ちゃんにはなついていた。

実はこつそりと最愛の彼女の写真をいつも眺めている田中ちゃんを可愛いという女子生徒も多い。

「それで田中ちゃんなんで俺たち呼んだの」

光がそういうと、田中ちゃんはそうそう、と分厚い資料のようなものを俺たちに一部づつ差し出した。

長期短期留学派遣制度と書かれたきらびやかなパンフレット。

青空の写真に、金髪でブルーの目の若者が笑っている、そんな表紙。

「What is this?」(なんだよこれ)

「...I'm not sure. 留学?」(さあ。留学?)

俺と光は目を合わせて首をかしげた。

「What the hell. Does he want us to study abroad?」(んだよ、田中ちゃん俺らを留学させる気?)

「I think... But I've already...」
(たぶん、でも、俺はもう、)

こそこそと話す光と俺の前で、田中ちゃんがパチンと手をあわせた。

「そう。特待生として、この高校から留学に行く制度、聞いたことなくてもないだろ?その数枠の中のうち、学校側としては語学に長け

ている2人に行ってほしいわけだ。」

田中くんは資料をばらばらとめくった。

俺たちは頭上に疑問符を浮かべながら田中くんの隣に椅子を移動させて勝手に腰かけた。

光はくるくると回る椅子で遊びながら鼻歌を歌って、田中くんの言葉を聞こうとしない。

帰国子女の自分には留学なんて必要ないともいうような態度だ。

こういう無邪気さの裏で英語を忘れないようにいつも洋楽を口づさんでるのを知っていた。

「椎木聞いてくれよ」と情けない声を出す田中くんを俺はまだ眠気の覚めない目で眺めていた。

こういうやる気のなさが、田中くんをさらに傷つけたようで、彼は泣く泣く「資料だけはもらってください」と小さくつぶやいた。

光はピアスを左耳に戻しながらまた鼻歌を歌っていた。

廊下ですれ違う女子たちが、光の淡麗な容姿を見ている視線が少しうっとおしかった。

光と歩いていると、いつも誰かに見られている気分で、気味が悪い。光は自分の人気を知ってか知らずか「ばいばい」と、女子たちに可愛く手を振っていた。

ダンダンとボールを打ちつけるリズムが一定に響き渡る体育館の裏。コンクリートの階段に足を延ばして座り込む。手にしているのは先ほど担任の田中から渡された留学制度の資料。後ろの方のページにうちの高校の付属大学の留学制度の一覧が書きしるされていた。

田中の言いたいことは、こうだ。

「付属大学へ進学しろ」

1年の時、すでに語学留学を経験している俺に大学へ進学してもらい、その大学から正規留学をしてほしいといったところだろうか。田中はそんなことは考えていないだろう。学校側からの意思を伝える術になっただけだ。

同じようにエスカレーターで大学へ進学しろと暗に告げられた光は、教室に帰るなり資料をゴミ箱へと捨てていた。帰国子女のあいつにそんなものは必要ないのだろうか、とそんなことを考えていた。きつというんな将来が用意されているようにも思えた。

半分だけ開いた体育館のドアから先月別れたばかりの彼女の姿を捉えてため息が出た。先月別れた、とはいっても、もうすでに10か月間の絶縁状態が続いていた。

一生大事にできるような気持ちで付き合おうと自分から告げた、彼女、すずはるかえで鈴原楓。

付き合っただけの数カ月、大した出来事はない状態のまま、俺はアメリカへ語学留学のために日本を離れた。待っていてくれの一言も言えないまま離れた俺に、10カ月間一度も連絡をよこさなかった彼女に、俺たちは終わったんだと思った。

鈴原のことは誰にも話さなかった。彼女も友達にそれを告げている

様子はなかった。俺なんかより男らしいような性格だったから、今では妹のゆずるの親友として俺の中で存在している。

「怜？なーにしてんの」

思いに耽っていた俺に声をかけたのはバスケ部の女。名前は忘れた。ゆずると、鈴原の属するバスケ部の女だったので覚えていた顔。きつと一度、ゆずると俺の家へ来ていたことがあった子だった。

「いや、別に。なに？」

資料を丸めこんで立ち上がると、くりつとした子犬のような目でその子が俺を見つめた。

こういう媚びるような顔をする女が、次に発するセリフを俺は知っていた。

「ねえ、怜、つてさあ」

そこまで聞いて俺は歩き出した。待つて、というその子のかわいらしい声が聞こえて振り向くと「好きだよ怜」と、目に涙をためたその子がいた。

一生懸命しぼりだした言葉なのだろうか、それとも、演技のための涙なのだろうか。俺はため息が出そうになるのを抑えてほほ笑んだ。これは精いっぱい演技だった。そうして「ありがとう」と言うこと気付く、妹の演技力のすごさ。

腹の中がぐるぐるとして、自分が嫌になる瞬間でもある、この演技の一瞬。

「彼女になれないの？」と聞いてくる女は今まで何人もいた。自惚れてなどいない。俺の彼女になりたがる女の目的が、光と近づくとだと、なんとなく感じていたからだ。

光の彼女になれないのなら、せめてその親友の彼女として扱われようと、そんな心が見えるようだった。

すべての女がそうじゃなかったとしても、俺はもう特別な人間など作ろうとも考えていなかった。

「今は英語を頑張りたいから」と付け加えると、うまい言い訳になることを知って俺はいつも最後にはこう言った。

英語なんてツールにすぎないのに、一生懸命になることが語学だと、女はなぜか俺を恨んだりしなかった。

名前も知らないその子が体育館に戻っていったあと、もう一度名前を呼ばれて振り向くと、ふにゃつとした笑顔の光がいた。

「あつね。怜びよん。Are you peeping Yuzuru?」(ゆずるのぞいてんの?)

光はここあっちね、と、汗で張り付く前髪をかきわけて、俺の隣に腰を下ろした。

「別にゆずるなんて見てない。嫌でも家で顔合わすんだからさ」

うんざりしてそう言っていると、くつくつと光が笑った。口元に手を当てて「sorry」と言った。

「確かに。あいつ、性格わりーね」

「外ではいいんだけど」と、笑顔を振りまくゆずるを見て言うと、え？と、横から帰ってくる疑問符。

光はゆずるとじつと見据えている。

ボール蹴っちゃった、と、無邪気に笑っている彼女を睨みつけて、光は舌打ちをした。

「いや、俺はこういうゆずちゃんが、嫌いだ」

大きな目をこれでもかと細めて言う光の声は、低く、かすれていた。

「光？」振り向けば「何？」と満面の笑みの彼。少しほつとして前を向くと、さっきの女の子と目があつた気がした。

その視線が光でなく、ずっと自分に向けられていることがむず痒かった。

「She is staring at you isn't she?」(あの子怜びよんのこと見てね?)

「I dont know...」(知らね)

頬杖をついている光の顔が、こちらに向けられていたが、気付かない振りをした。

「ただいま」という声が光の「ただいま」と重なった。

ここ俺の家、佐伯家で英語の課題をしようと、コンビニに寄ってから光と共に帰宅した。

放課後、バンドの練習へ向かわない日は、たいていこうして光とつるんでいた。

駅と家の間にあるコンビニでゆずるに頼まれた、というよりは半ば命令に近い口調で買うように言われたゼリーを買って帰った。

「ゆずる本当にわがままだな」という光はいつも通りゆるく笑っている。

先ほどの体育館裏での光の表情を見た後だったので少し不安になってみたが、優しい顔をしていた。

兄貴である俺よりも、兄貴らしいような顔つきだった。

玄関で、スリッパいらね、と2人でスリッパを蹴り合いながらリビングに入ると、

ソファアに寝ころんで携帯をいじっているゆずると目があった。

短いスカートから伸びた足を使って手繰り寄せたりリモコンでテレビのチャンネルを変えたりと、相変わらず行儀が悪い。

それを見ていると、「何？見ないで」と、また凶悪犯のような顔をした。

「ゆず、パンツ見えるよ。はいゼリー」

コンビニの袋を目の前に差し出す。ありがとうなんて言葉は期待していないかったが、代わりに「うぜー」と返ってきた。

単調で冷たい口調の彼女の手握られた携帯電話のメール画面には可愛い絵文字がたくさん入った作成中のメッセージ。

その相手がバンド仲間のシユウ君だと察した俺は、またため息がで

た。

「俺の友達に手出すのやめてくんない？」と言うと、ゼリーをひつたくつたゆずるの方からクッションが飛んできた。

シユウ君のことが癪に障ったのかと右頬を人差し指でかくと、「スプーンがないんだけど」と、今度は空になったビニル袋が飛んできた。

「ねえ、あんただって、楓に手、出したじゃん。死ねよ」

キッチンで晩飯の準備をしていた母さんからスプーンを受け取ってゆずるの元に戻ると、隣にいた光がすつと腕を出して俺を制止させた。

「早く。何してんのよ」といってスプーンを強請るゆずると視線が合うよう、光がしゃがみ込んだ。

近づく2人の髪色が、よく似た色だな、なんてぼーっと見ていると、光がゆずるの頭にぽんつと手をのせた。

噛みつこうにも噛みつけない、そんなゆずるの白い歯がギリギリとなっている。

「ゆずちん、俺の前では演じなくていいの？」

「は？」

そんなゆずるの声は苛立ちを感じさせる。

「なんなのあんた。意味不明。あんたにいい顔してなんかあんの？」
食べる気うせたわ、とゼリーを机の上にはんつとおいたゆずるは、携帯の画面に向かい直した。

シユウ君からの返事が来たのであろう、また、メッセージを打ち出したゆずるに俺はもう何も言えなかった。

“楓に手、出したじゃん”という言葉が頭の中をぐるっと駆け巡ったからだ。

「ゆずちん。おまえ、学校で演じてる意味あんの？」

「あんたに、関係ない」

ゆずるが涙目になったのを見て、演技ではないと察した。

「光。上、行こう」

もう17年も一緒に暮らしてきた妹の、演技かそうでないかは見抜けるようになっていた。

そもそもゆずるが外面、というものを作り出した頃を俺はよく知らないが、家族以外でこつも悪態をつくのは光にだけだった。

階段を上る俺たちの背中に向かって「死ぬ」と言っただけゆずるの声に、光がくすりと笑ったのを俺は見落とさなかった。

「Why are you laughing?」（なんで笑ってるの？）

「Well... maybe I like her real characteristic.」（ん、たぶん俺、ゆずちんのあいうとこ好きっぽい）

ちらりと振り向くと、ゆずるは可愛い顔をしてゼリーを頬張っていた。俺たちには向けられない、クラスメイトにも向けられない本当の笑顔だった。

「まじで？ But I cant understand you at all.」（まじで？光意味わかんねーよ全然）

それでも、血のつながった唯一の妹、それも双子のゆずるを、好きだという光に心があつたかくなる感覚だった。

部屋に入って課題を進める俺の横で、雑誌を読み始めた光のせいで、課題は一旦中断。

話は鈴原やシュウ君の話になっていた。もちろん、さっきゆずるの一言がそうさせたのだ。

「鈴原の何がよかったの？いや、そりゃ美人だけだよ。」

光はばらばらと、雑誌のページをめくった。読んでいるというよりは、ただめくるといふ行為を繰り返しているだけだ。

「好きとかよくわかんねーけど、はじめて興味持った人間だった」
淡々とした口調で話す鈴原は、いつでも余計なことは口にしない、ツンとした女だった。

媚びてくる子犬のような目が苦手だった俺は、そのさらっとした一

見冷たい目にひかれた。

お互い、一度も好きだとかそんな甘いセリフは言わなかったけれど、ずっと続く関係だと思い込んでた。

約束を嫌う俺に、期待という束縛をしなかった鈴原は、俺にとって最高にいい女だった。

同様に鈴原を野放しにしていた俺。どちらからも行動を起こさなかった俺たちは、ある意味自然だった別れにたどり着いた。

「それが今はゆずちんの親友だもんな。」

けらけらと乾いた声で笑う光は、ゆずるは性格悪い、とまた口癖のようにそう言った。

「でも、さっきのはちょっと焦った。ゆずるいじめるの楽しいけど、ばーちゃんかさ、女の子泣かせちゃだめって言ってたから」

細い毛を触っていた光の手が胸元の懐中時計を握った。

祖母の形見だというそれだ。

「でもやつぱゆずかわいくない」

ふざけて光は笑った。

俺は少し驚いて、「そうだよな」という声が一瞬でなかった。

17年間ゆずるを見てきた俺の他に、ゆずるの本当の涙を光が察したことに、だ。

そこに興味がわいた。鈴原を初めて知ったあの日の感情のように、「exciting」そう、まさにわくわくと胸が躍るような気分だった。

ガラリと扉を開けると、HR直前のいつもの教室の風景だった。教壇には担任教師の田中ちん。

「怜、ラッキーだな。俺が担任じゃなかったらアウトだぞー」

田中ちんはそう言って顎で俺を席に着くように言った。留学や大学の話は何もしなかった田中ちんにほっとして席についた瞬間。

「佐伯、ちよつと来い」と田中ちん。

「怜びよんなんかしたの？」というクラスメイトに田中がゆずるの名前を呼んだ。

「怜じゃない。ゆずるの方。」

ひよいひよいっと手招きする田中ちんの方へゆずるが向かい、そのまま職員室へと消えた。

小走りで田中ちんの方へと行くゆずるのスカートがめくれないかと心配で、父親のような気分になって見つめてしまった。

ふわふわとウエーブのきいた髪を揺らしながら田中ちんの腕にまわりついていくゆずるを、うらやましそうに見る男子生徒は、確実にあいつの本性を知らないんだな、と。

そんな風に思っていたのは俺だけでなく、隣の席の光もそうに違いない。

今朝も、クラスメイトにおはようと朝の挨拶を愛想よく振りまくゆずるが、光に向かって「死ね」と吐きだしたのを聞き逃さなかった。それでも光はゆずりはかわいい、と笑うもんだから、俺は面喰ってしまった。

職員室に足を入れたゆずるは、田中の隣の席の椅子にちよこんと腰をかけると、真剣な眼差しである資料に目を通していった。

青空を背景に、金髪の少年少女が笑顔で写っているそんな表紙の資料。

先日、怜や光が手にしたものと同じ留学の資料だ。

「せんせ、私、絶対行きたいの。夢なの。私、田中ちんみたく教師になりたい」

同じく田中も資料に目を通しながら、うーんと唸った。

今の成績では、留学制度の特待生枠に入るには厳しいと、何度も同じことを言ってきた。

しかし伸び悩む英語の成績に、田中はもちろん本人が一番苦しんでいた。

「怜が行けて、なんで私がだめなの。怜なんて、全然興味もないくせに。本当に夢なの」

わかって。と、田中の手を握るゆずるの手を、田中はそつとはらった。

「ゆずる。おまえな、必死なのは先生も理解してるけどな、教師に色目を使うな。それに」

田中は小さくほほ笑んで言った。

「教師になりたいなんて嘘だ。そんなに怜が、嫌いか？」

ゆずるは、心の奥底の本音を見抜かれたようで手のひらが汗ばんだ。そして、歯を見せて笑う田中に、なんだか肩の力が抜けた。

「ごめん田中ちん。私、怜に勝ちたい。怜の得意な分野で、怜の上を行きたい」

ゆずるは続けた。

「でも聞いて。真剣なの。語学が好きなのに嘘はない、です。本当。だから田中ちん、私に英語を教えて。怜には頼めないの。」

唇をきゅっときつく結んだゆずるの肩をぽんぽんと叩いて田中は「もうすぐ1時間目はじまるぞ」と言った。

新人教師として学校側の留学制度について強く発言ができない田中の心は理解できたが、「協力する」や「がんばれ」の一言がないことにいらだちを感じた。

そしてまた、どうせ惨にはかなわない自分を恨んだ。

西側の窓から夕日が差し込んで、本に陰りができる。ため息をつきながらも、右手に握ったペンはするすると紙の上を滑って行った。

図書館で勉強をはじめたのは数週間前。図書館、という場所に入るのに、なぜだかためらいを感じたのは初めの一回だけだった。

いかにもまじめ、といった雰囲気その空間と、そこを利用する生徒たちに、少し壁を感じていた。

だけどそんなものは偏見や単なるイメージでしかなく、皆、自分の空間を見つけて何かに没頭しているだけだった。

一番端の窓側の席に腰をかけて、本棚から引つ張り出してきた参考書を目の前に数冊積んだ。

そして目にかかって邪魔になる前髪をきゅっとピンでとめる。それだけで、少し賢くなれる気がした。

参考書に並ぶ難しい単語や文法にタジタジになりながらも、夢のためなんだとペンを握り直した。

「んーわっかんね。死ねよバカ。何これ」

長時間机に向かうという行為自体にストレスを感じ、握っていたペンをバンッと机に叩きつけた。

ぐっと背伸びをして、深呼吸。日が沈んでいき、図書館にいた他の生徒たちはほとんど姿を消していた。

携帯を見ると、もう8時を過ぎていた。

「だめだ、集中できない。わっかんない」

小声で参考書に向かってつぶやくと、もう少し頑張れるような気がした。勉強を教えて、なんて、自分のキャラではないと、友達や先輩、ましてや怜には言えるはずがなかった。

「もうすぐ閉館ですよ。」

頭上から降ってくる声にノートをまとめる手をとめた。

今日はこんなものか、と、参考書を閉じる。

「すみません。もう出ます」

そう言つて声をかけてきた人をみあげると、見なれた栗色の髪。日本人離れした顔だち。そしてむかつくほど自慢げなその笑み。

「光、なんで」

へえ、と参考書を物色しながら向かいの席に腰をかけた光を、私はじつと見つめていた。

夕日に染められた光の髪は、いつもよりきらきらと光っていて、その表情はいつもよりも艶っぽく見えた。

「ゆずる」

「何。茶化しに来たの？うざい。ちよーうざい」

少し感情的になった私の声は図書館に響いた。はつとしてあたりを見回すと、数人がこちらを見ていた。

恥ずかしくなつて参考書をまとめると、かばんを持って立ち上がった。

「ゆずる、好きだよ。」

光が私の腕をきつく掴んで、そんなことを言つた。口元だけが笑つていて、その表情からは感情が読み取れない。

私の反応をうかがうように、首をかしげて、ただ反応をまっっている。一瞬、光の口から何と言われたのかがわからなくなって、頭が真っ白になった。放課後に詰め込んだ英語に関する知識や語彙が全てふつとんで、「好き」なんてチャチな言葉がぐるぐると体中を駆け巡つた。

冗談に決まつてるじゃないか、と、そう冷静になるのに数秒要した私は、あくまで動揺などしていない振りをした。

「そついつの、まじつざい。離して」

余裕な態度にむかつて、腕を振り払うと、私は彼に背中を向けた。ときどきと鳴る心臓が、口から出てきそうなほど息が荒くなった。それは光の腕の熱さへの戸惑いと、いらだちから来るものだった。

「ゆずる」

笑みを含んだような声色で名前を呼ばれ、振りかえらずに「何」ときつく返すと、またその声が響いて、数人が振り返った。

「ばいばい。また明日」

かっとな熱が顔に集まって、私は大股で歩き出した。

参考書を返却口の台にはんと置いて、図書館を後にした。

校舎を出ると、まだ少しひんやりすると夜風の中、自転車をこいだ。

窓の隙間からひんやりとした風がカーテンを揺らしながら部屋の中に入ってくる。よその夕食の香りと、初夏の香りが入り混じったような、そんな風が鼻をくすぐった。

夕食を終えて、ひとり部屋にこもり、ジャジーな音楽を流す。耳に届くか届かないかの、そんな音量で。ラックに収まりきらないほどの洋楽のCDが溢れ返っている横で、でかく構えているステレオを眺めるのが好きだった。ロックバンドのメンバーでありながら、アコースティックやジャジーな音楽を好む俺にはロック魂、などというものは備わっていないらしい。それでもバンドの練習はわりと好きな方だった。何にでも手を出し、何でもそれなりに形になり、だからこそ夢中になれる“これ”というものがなかった。いつしか何にも興味がなくなり、それなり、というスタンスが、俺、というものになっていた。

流れる曲を口づさみながら、眠りに落ちそうになったとき、握りしめていた携帯電話が小刻みに震えだした。

薄く開いた瞳でそれを確認すると、見慣れた名前。

「んーあ、もしもし？光？」

ベッドに横たえたまま、クッションを抱きかかえて返事を待つ。いつものハイテンションな光の声が「怜ぴょーん」と俺の名前を呼んだので、俺は小さく「うん。どした」と返した。

少しの沈黙があつて、光はもう一度俺の名前を呼んだ。俺はクッションを放り投げて遊びながら、耳だけを光の方に傾けた。

「俺さー、そういえば今日さーゆるするに振られた！」

もう一度閉じかけていた瞼がまさに、ぱちり、と開いた。

「なんて？」

「She turned me down...」(ゆずずにふられた)

光の声色が艶っぽくなって、俺は心臓がドキリとした。が、すぐに笑いがこみ上げてきた。

「おまえ、何言ってるの？告白でもしたのかよ」

腹の底からくつくつと笑いがこみ上げてきて、こらえ切れずに吹き出したが、はっとして口元を抑えた。

開けっ放しの窓から漏れた俺の笑い声をゆずるが聞いたら、と考えた自分。そして今日はまだ帰宅していない彼女を思い出してうんざりとした。

「ごめん、で、何？」

むくりとベッドの上に起き上り、携帯を耳に当て直す。

「とりあえず、俺、怜には言っておこうと思ってさ。」

「え、なにを」

「俺ゆずることまじだから。」

それじゃあ、と言って切れた電話。通話終了を知らせるツーツという音がうるさいほどに耳に流れ込んできた。

我に返って携帯を机の上にのせた時、玄関のドアがボタンを大きく音を立てて閉まる音がした。

そして、どすどすという音が階段を上って近づいてくる。

「ゆずる、か。」

親友が、自分の双子の妹を、女、として見ていると思うと、なんだかムズかゆく、こそばゆいような、なんとも言えない感覚が俺を襲った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1559s/>

目覚めても僕が存在する世界

2011年10月8日20時44分発行